

日本の福音主義神学に未来はあるか

エバンジェリカル（福音派）の立場が、リベラル神学の圧倒的支配下にあるこの日本において（『聖書と教会』1987、2月号「特集 戦後における日本の神学の歩み」の中に福音派の神学活動について一切言及はない）、意味ある一つの選択（option）として評価され、市民権を獲得するようになるのは、はたして可能であろうか。そのように日の目を見る日は来るのであろうか。エバンジェリカルの“アイデンティティ”問題と“成熟”の課題が国際的に激しく論じられている今日の状況において、福音主義神学の責任を果たすべき使命はきわめて大きいと言わなければならない。

まず、基本的なこととして、今日、福音主義神学はただ過去の伝統と遺産を忠実に継承・反復するだけでなく、過去・現在・未来を展望しつつ“Authentic”（真性）な福音主義神学の展開を求められている。期待されているこの“Authentic”（真性）な福音主義神学は、根本的には次の四つの特質によって特色づけられていなければならないであろう。

真に聖書的、福音的であること。『聖書的適格性』の問題。神のことばである聖書に向かつていつも従順であること。

分派的自己流であってはならず、公教会的であること（ベルギー信条29条）。「あらゆるところで、常に、すべてによって信じられてきた（五世紀のレランのヴィンケンチュース）」ところの『正統信仰の共同性』を反映するものでなければならない。

『現代的適応性』と四つに取り組みものでなければならない。福音主義神学は、“modernizing Jesus”「イエスを現代化すること」（Henry Cadbury: *The Peril of Modernizing Jesus*, 1937）の危険と“archaizing ourselves”「私たち自身を古代化すること」（Cadbury: “The Peril of Archaizing Ourselves” Interpretation 3, 1949）の危険、あるいは“acontextual”「文脈を無視した」神学（自然科学の研究とのアナロジーにおいて捕えられたチャールズ・ホッジのような方法論に立つ神学）の研究と「文化とキリスト」というモチーフ（H. リチャード・ニーバー『キリストと文化』1952）に立つ“synthesis”神学の危険（例 - 日本的キリスト教。また、今日、世俗性そのものが危機的状況にあることを銘記すべきである。）をともに避けつつ、“contextualization”を自らの方法論となし、聖書の使信の高さ・深さ・広さを特定の文化言語と思惟様式において積極的に立証することを不可避の機能として担うものである（J. Davis: *Foundation of Evangelical Theology*, 1984）。

『自己革新性』を不可欠の属性として具有するものである。「改革された教会は常に改革し続けなければならない」ということがプロテスタントの根本精神である上に、福音主義神学は正しい意味での革新性（自己改革的であること）をその特色として示さねばならない。また、合わせて批判的学問性 - このことが古くから使い古されたものや、真理から魔術的に墨守する遺産を作り上げる、いわゆる非批判的伝統主

義に感情的に固着することから神学を守る - に特色づけられたものであるべきであろう(正統主義神学へのギリシャ哲学の主知主義的影響に関するヘルツマ氏の指摘)。もちろん、その場合、ハインリッヒ・ショルツが言うような近代の世界観と近代の自律的理性の立場で考えられた一般の科学の世界で重んじられている批判的学問性ではなく、あくまでもカイパーやヴァン・ティルなどが提唱した**キリスト教有神論というパラダイムに立った批判的学問性**でなければならない(春名純人『哲学と神学』)。

さて、以上の四つの特徴を持つ福音主義神学をこの日本において展開しようと努力するにあたって、どうしても一度通過しなければならないステップは、**敬虔主義運動(信仰復興運動)**、**自由教会(フリーチャーチ)**の伝統、**アメリカ・ファンダメンタリズム**の三者の混交・混合(シンクレタイジング)のプロセスを通して産み落とされていった**“特異なメンタリティ”**を徹底的に精査し、主体的に評価し直すことであろう。この自己批判的作業なくして未来は開かれてこないのではないか。では**“特異なメンタリティ”**とはどのようなものか。

教会の歴史的伝統との関係を絶ち、イエスおよび初代教会の教えと実践に直接つながろうとする**原始主義“ primitism ”**。みことばと御霊さえあれば、教会の過去の歴史的遺産とは無関係であるとする傾向。(「シカゴ・コール」1977 参照)

「教理や信条ではなく、生命・生活である」、神学抜き「心情の宗教」、「生活の宗教」という一種の**二元論的分裂思考**。

聖書主義“ biblicism ” - そこにはキリスト教の全体的体系的な理解と福音の全真理間に見られる内的構造の把握と各教理を扱う際のバランス感覚が見失われていく。

「魂を救うこと以外には、何の関わりも」 - 教会の目的を伝道事業にしぼるという**伝道至上主義**への一面的な偏向と、その背景となっている**歴史的悲観論・文明滅亡論**および神の支配“ **dominion** ”モチーフ、“ **kingdom-theology** ”の事実上の喪失。

問題を単純化し、物事を**単純なアンチテーゼ**で見ようとするリバイバリズムより受け継いだ体質(ニーバーが指摘する**キリストと文化の対立的見方**)。

反知性的傾向と反動性の貧困およびその非生産性の問題 - 啓蒙思想の主張する理性ならびに近代西洋文明の人本主義的精神に反対するあまり、次第に誤って**宗教と知性とを対立させる傾向**を強めていったために、信仰と理性の正しい関係論を見失ってしまった。その結果、**生の全領域におけるアカデミックな活動が姿を消し**、学的主導権はリベラル派の手に渡ってしまうという事態を招いて今日に至っている。

リベラリズムとの論争と闘争を通して作り上げていった**分離主義“ separatism ”**と**自己閉鎖的、自己防衛的体質**(詳しくは、拙著『福音主義キリスト教と福音派』、拙編『ポスト・ローザンヌ』1987 参照)

(宇田進「第八回 現代福音主義セミナー資料」1988)